

令和6年度 第2回 調布市子ども発達センター運営会議 議事録

日 時	令和7年2月5日（水） 午後3時～午後4時30分
場 所	子ども発達センター1階ホール
出 席 者	1 運営委員 11人 2 オブザーバー 3人 3 事務局 8人
議事次第	1 センター長あいさつ 2 委員・事務局等紹介 3 議題 (1) 令和6年度利用状況について (2) 各事業の振り返り及び次年度の各事業の方針について (3) その他 【配付物】 資料1 令和6年度利用状況について 資料2 各事業の振り返り及び次年度の各事業の方針について 資料3 調布市子ども発達センター運営会議要綱 資料4 調布市子ども発達センター運営会議委員名簿
議事録	1 センター長あいさつ 2 委員・事務局等紹介 自己紹介 3 議題 (1) 令和6年度利用状況について 資料1 参照 <事務局> 資料1 令和6年度利用状況について説明 <会長> この説明について、質問や意見はあるか。 <委員> 資料1の4番の運動療法グループは、令和5年度から開始されているがこの運動療法グループというのは具体的にどういった児童が利用できるのか。何歳からか、何か対象となる条件があるのか。 <事務局> 運動療法グループは、運動療法を利用する0～2歳児のお子さん全員が対象である。主に保育園などに在籍していないお子さんをお誘いしてグループ活動を行っている。今、0歳から2歳児のお子さんが6～8人ぐらい在籍している。 <委員> 0歳からということは、生まれつきの何らかの障害があるということを理解してよろしいか。

	〈事務局〉　　はい。運動療法は6か月から利用できる。
	〈委員〉　　子ども施設訪問事業は減っていると先ほど言っていたが、何か理由はあるのか。
	〈事務局〉　　令和3年度から、巡回支援事業を新しく始めた。専門職と福祉職、保育士が同行し、希望された園に定期的に巡回し助言をするという事業である。それが絶対の原因だとは言えないが、巡回支援事業を令和3年度から始めたことによって、令和5年・6年と減少傾向にあり、子ども施設訪問事業から巡回支援事業に切替えた園も結構多かったことが原因ではないかと考えている。
	〈委員〉　　その巡回支援事業についてはどこにあるのか。
	〈事務局〉　　巡回支援事業については、資料2で説明する。
(2)	各事業の振り返り及び次年度の各事業の方針について
〈事務局〉	資料2　各事業の振り返り及び次年度の各事業の方針について説明
〈会長〉	ただいまの説明に関して質問や意見はあるか。
〈委員〉	1番の通園事業で今年度実施した外部施設でのプール活動について興味がある。詳しく教えてほしい。
〈オブザーバー〉	国立にある多摩障害者スポーツセンターで行った。専門の先生もついて指導を受けながら職員も保護者も同行し、プールでリハビリテーションを行った。
〈委員〉	平日に実施をしたのか。
〈オブザーバー〉	その通りである。
〈委員〉	希望者は国立に行き、希望されなかった方は通園で過ごしたのか。
〈オブザーバー〉	はい。1日3組ぐらいで実施した。
〈委員〉	一回の実施ではなくて複数回実施したのか。
〈オブザーバー〉	複数回実施した。
〈委員〉	通園事業、発達支援事業どちらも、親の会等の話合いの場で伝えてき

たことが実現されると感動している。プールについては、自分の子どももがあゆみ学園に通っていた頃には屋上の小さなプールだけだった。水泳は身体に良いので、どこかで大きなプールに入れたらいいと思っていた。外部施設のプールを利用しているのだと知って、本当にすばらしいと思った。

グループ療育に作業療法士や理学療法士が加わり、保護者にとって療育を始めるにあたり、専門の方が近くにいて相談できるというのは本当にありがたいことなので、これからも継続していってほしい。

〈事務局〉 昨年、2歳児のフォローグループを実施した。フォローグループには作業療法士が入り、参加しているお子さんの体の使い方等に関わった。今年は作業療法士たちが、フォローグループではなくて実際に2歳児グループに入ってみようと意見を出してくれ実現できたので、続けていければと考えている。

〈会長〉 利用者の方のリクエストを聞くだけではなくて、センター自体がより良いサービスを提供しようと考え実践している。今のような報告が出るというのは本当にすばらしいことだと思う。

〈会長〉 ちなみに、そのプールは、プール活動を支援する専門職の方がいらっしゃるのか。乳幼児の一般的なプール活動の指導をする人は多いが、プールはある種危険な所もあるので、いろんな支援が必要な子どもたちへの専門性を持たれた方が指導されているのか。

〈オブザーバー〉 私たちも今回プール活動を行うに当たって、保護者と一緒にどこかプール活動ができるところはないかと探して、先方とも話を詰めて実施した。プールが深いので、使っていいコースに台を入れて、ちょっと浅めにしてほしいという要望もできるという話だったが、一般の方もいるためなかなか全部を受入れられはしなかった。提案されたのは、入水する時にお子さんが自分でどうやって体を動かしたら水中で体勢が取れるか、姿勢が取れるかということを専門のコーチが指導をするため、もうちょっと深い水深の方が指導がやすい。安全を見守りながら活動するのはどうかと提案され、まずはやってみた。今回は発達センターのやりたいやり方と多摩障害者スポーツセンターとの要望をすり合わせて、全ての回でコーチがついてくれたので、実際にやって良かったという感想を聞いている。

〈会長〉 国立市では、こういうのをもうルーティンでやっているのか。

〈事務局〉 都の施設で障害者スポーツセンターのプール。プログラムの中に障害児用のものがあるのだと考えられる。

〈委員〉 水泳に関しては、うちの息子が脳性麻痺の為、スイミングをやらせたくて1歳ぐらいから市内の民間水泳教室を利用して、ベビースイミングからキッズスイミングで親子レッスンを受けていた。そういうた民間の施設の中でも、専門の指導ができる人がいるところもあるので、せっかく子ども発達センターでそういう経験をしたということで、その後も継続してできるような道筋が本当はできるといいと思う。「外部施設を利用して」との事で調布市内のプールかと思ったのだが、国立市だったので、欲を言えば、調布市内の総合体育館プール、調和小学校には可動式で水深を浅くできるプールで小学生が利用するので、温度もそんなに低くなく1年中使えるプールがあるので、卒園後もスイミングを継続できる施設につなげられるよう協力してもらえるところがあつたらよいと思った。

〈オブザーバー〉 プール担当の職員が多くの所を実踏した。そこで、一番ひつかかったのは排泄問題というところであり、理解を得られた施設がここだった。「紙パンツが取れていないから駄目です」という線引きをされたのは事実。

〈会長〉 貴重な御意見。

〈委員〉 先ほどの事業に一度参加した。うちの子は自閉症で、初めてのところが苦手で、かなり「ぎやあ」となってしまって、ほぼほぼ入水はできなかつた。3組行って、ほかの2組のお子さんたちはそのまま入水していた。ただ、入水できなくても、やはり「無理に声をかけると駄目だよね」ということも指導員も分かっており、無理やり入れようしたりとか、そういうのもなく、「ちょっと心の準備が整うまで待とうか」とそういう特性を理解している方がついてくれていた。

あと、その後も、そこで登録をすれば使えるという説明はされている。ちょっと遠かったので、その後行っていないが、ほかの運動のコースとか、いろいろ障害児向けにある紹介もしてもらえた。

〈会長〉 継続的にこの件は工夫を重ねて、より発展させてほしいと思う。

〈オブザーバー〉 今年度やってみて分かったこともいっぱいあったので、実施できて良かったと思う。今回、一家庭1回しか行けなかつたが、さつきも言ってくださったように、これをきっかけに、「プールに足を運べた」、「今後も行ってみたい」、「また好きなことが1つ見つかった」という意見も多く聞かれたので、やはり御家庭の中ではできないことを私たちと一緒に初めてのことをやって、きっかけづくりになるということは、今回のプールに限らずできればよいとは思う。

〈委員〉 時期的に聞きたいのですが、資料には記載がなかつたが、今年度、小学校との連携を取り組み始めているとのだつた。今現在、就学支援シ一

	トを作成している最中だと思うが、例年と同じぐらいの件数で申請が来ているのか。
〈委員〉	まだ集計途中だが、数としては大きく変わらないかと思っている。
〈委員〉	主に支援級に行かれる方と通常級へ行かれる方が多いと思うが、通級を利用していない通常学級に行くお子さんのはうが、やはり件数的には圧倒的に多いのか。
〈委員〉	まだ集計が上がってきていないが、通級を使わず通常級に行くけれども心配があり、支援シートの作成を希望する方には作成している。
〈委員〉	この就学支援シートについて、大体例年5月に開催の就学説明会で就学支援シートを知って作成するという方が多いのか。センターで個別に「就学支援シートというものがありますよ」というお知らせはしているか。
〈委員〉	まず、グループ利用であったり、個別療育を利用の方については、担当の職員から就学支援シートについて話している。来年度から就学支援シートとか、i-ファイルとか年長さんへのお知らせを早めに出したい。
〈委員〉	今年度は、お知らせはしたか。
〈委員〉	秋頃配った。来年度は、就学に関する説明会で指導室と協力して配れるものを作れればと考えている。
〈委員〉	私自身も就学支援シートを作成する立場だったので、例年この時期というか、秋ぐらいから「就学支援シートってどのように書きましたか」と保護者から聞かれることが多い。どのようにと言われても、保護者が書く欄ってそんなに多くはないのだが、書き方にコツがあるのかどのように書いてもらったのかというような感じのことを懇談会等で聞かれることも多い。私は私のケースでしかお話しできないし、皆さんそれぞれどのようにこれを扱ったらしいのかというお悩みがある。発達支援事業では、グループ活動とか療育についてプリントを通して説明があったり、丁寧に育てていただいたので、就学時に子ども発達センターという支えがなくなってしまうのではないかということで心に不安を抱きながら小学校に入学する方はとても多いと感じる。その辺りをバックアップしていただきたい。
〈委員〉	今のに関連して、8番のところにある「令和7年に就学する発達センター利用児の引継ぎの調整を行うなど、就学時のコーディネート業務に

も取り組み始めています」というところをすごく期待して読んでいたが、具体的にどういうことをするのか。指導室の方がいらっしゃっているので、小学校側としてはどのような連携を取れそうかなとか、そういう連携が既に取れているのであれば、教えていただきたい。

〈事務局〉 去年までは特別支援学級に進まれるお子さんに関して、学級から希望があれば、引継ぎを行っていた。今年度は、通常級に進学されるお子さんも含めて、引継ぎを希望される学校があれば担当していた者が引継ぎを行うということを開始する予定。もう既に何校からか通常級に通われるお子さんの引継ぎをお願いしたいという依頼を受けており、発達相談コーディネーターが対応しているところ。

〈委員〉 具体的に何校か。

〈事務局〉 本日の午前中に校長会で案内をしており、事前に御依頼いただいているのは2校。

〈委員〉 ありがたいなと思っている。今、自分自身が小学校のお手伝いとかで学校へ入っているので、通常級の中での困難さを抱えている親御さんやお子さんもいらっしゃる。そこはどのようにつながっていくのかというのは難しいと思っていたが、子ども発達センターが校長会において話をして、実際にもう2校来ているというのはすごく期待できると思う。

〈事務局〉 今年度も実際にそういう引継ぎをしており、4月に調和小学校のコーディネーターの先生と1年生の担任と、通常級に通うセンターを利用していた方の今の状況や、センターでどうだったか、どういうことを行っていたのかという引継ぎを行った。

〈委員〉 就学について関連して聞きたい。交流保育について、年長さんが地域の保育園に来て5歳児クラスと交流するという事業で、長年半日一緒にいて給食が終わり、お迎えが来る形態をずっと取っていると理解している。お子さんによっては本当につらそうで、給食も嫌だし新しい場所の人もよく分からないし、軽くパニックまでは行かないが、明らかにこの子はかわいそうな感じがするなと思っている中で半日過ごしたりする。だから、もうちょっとあの事業を、お子さんの状況や症状によってもっと違うやり方とか、せっかく交流できるのであれば、時間をもうちょっと限るとか、公園で一緒に会うとか、やはり園庭って独特で囲まれている雰囲気もあるので、あれが多分プレッシャーになって感じているお子さんもいらっしゃる。何かもっと改善できるところは改善されてもよいと思いながら、毎年あの事業を受けている。

〈オブザーバー〉 交流保育とは通園事業のお子さんを対象に行っている事業である。コロナ禍の前は4歳児さんも行っていて、その前のときには3歳児さんからなどいろいろやってきた経緯もあって、回数も全然違ったりしていた。コロナ禍で一回なくなって、また復活したところで、現在5歳児さんだけを対象に全体の人数を考えて3回程度行っている。

交流保育については、私たちの中でもかなりどのようにしたらもっとお子さん同士で関われるかとか、楽しく過ごせるかなどと、ずっと検討し続けている事業の1つ。ご提案くださったようにこちらに逆に来ていただいて遊ぶ機会をつくったらどうか、公園等で一緒に遊んでみてはどうかということを今もいろいろ話し合っている事業ではある。

目的の1つとしては、支援級に行ったりとか、通常級に行ったり支援学校に行ったり、いろんなお子さんがいるので、地域で育てていきたい、育っていくことを目的にしていて、地域のつながりということも目的にしていたので、住んでいる地域の保育園に協力を依頼していた。ただ、あの形が正解だと思ってはいないので、引き続き、どういう形がいいのかというのを検討していき、相談や意見等をいただき事業内容は検討し続けていきたい。

〈委員〉 本当に地域というのは大事だと私たちも思っており、もっと気軽に年3回ではなくて、何なら保護者の方が地域交流ではないですが、地域の近所の保育園に時々遊びに来るような、そういうレベルでも良いのではないかなどと考えている。やはり地域でというのがそこに1つあると良い。

〈会長〉 大事な御意見である。保育所というのは、例の池田小学校の事件が起きる前は、もっと幅広く地域に開かれていた。それがどんどん狭くなってしまって、今おっしゃったように地域で子どもたちを育てるということがなかなかできなくなってきていている。だからこそ、今の意見というのは、長期的に見てできるようになるとよいと思って聞いていた。けれども、保育園の先生と子ども発達センターとで定期的にこの件に関して何か会話する機会とかというのは、現状はないとのこと。そういうのが年に数回でもいいから何かあるといいと思う。園長会ってどうなのか。現場の先生と話し合えるような機会があるといいと思う。同時に、小学校の先生と話し合える機会もあればいいと思う。でも、それぞれ忙しいから、なかなか難しい点もあるかもしれないけれども、そういうやり取りがあると少しずつ進んでいくような気がして、聞いていた。何かありましたらお話しいただければと思う。

〈委員〉 先ほど、今はまだ試行的な段階なのですが、児童館に発達センター職

員が出向いて、お母さんたちの相談に乗ることになったという話をした。実際にやってみると、お母さんたちの中で、「もしかしたらうちの子、言葉が出てこないのかもしれない」とか、「はいはいがほかの子と違う」とか、本当にちょっとした些細なことがすごく心配なのだが、それをこの発達センターに連絡して相談するという、そこまでの勇気というか、そういうものがなかなか無いというのが現状。そういう中で、発達センターの方が児童館に来ていただいている、ひろばの中に一緒に遊びながら相談に乗っていただくというのは、お母さんたちにとってはすごく気が楽というか、相談しやすい雰囲気の中でというのは、すごくいいなと思っている。今日、実際に来ている職員がいるので、ちょっとその辺の状況を皆さんに教えてほしい。

〈委員〉 児童館と相談して、申込制とかにすると、お母様方は構えてしまってなかなかハードルが高いかなというお話もアドバイスをうけた。「今日、発達センターの作業療法士とか言語聴覚士が来ていますよ。」「何かあつたらどうぞ」というアナウンスをして、実際に相談したくて目指してくれる方もいれば、たまたま来ているからちょっと話しかけてみる場合もあり、特に心配はないが日頃こんなことで困っていることを世間話みたいに聞いてみる。聞いていく中で、子育てひろばの相談員さんに振ってみたり、ちょっと橋渡し的なこともしている。まだ始めたばかりで、こちらもご相談しながら実施している。

〈委員〉 でも、お母さんたちは、本当に気楽に相談できる環境があるのは、すごくありがたいと思っている。今年度は東部児童館と佐須児童館の2か所でやっていただいているが、来年度も引き続き、ぜひやっていければと思う。

〈会長〉 よいと思う。こういう実践は本来こうあるべきだと思っているので児童館という雰囲気の中にうまく紛れ込んでいるという感じである。昔のように地域の中に子育てがよく分かる人がいて、その人にふらっと相談できるような、堅苦しくなく相談できるような雰囲気ができるというのが一番理想形だと思う。ただ、発達センター職員が、人的に足りなくなってしまうということはないか。

〈委員〉 まだ2館までしか広げられていないという状況。

〈会長〉 些細なことってなかなか相談できないから良いと思う。おそらく児童館の側でも紹介の仕方が上手なのだと思う。専門職が突然来てしまうと、逆にまたそこで戸惑ってしまう。

〈委員〉 事業の名前も、「教えてスクッピー」といい、イラストでお便りにかわいらしく案内したりしているのだが、それがまたよかつた。

	<p>〈委員〉 ちょっと関連して、健康推進課でも保健師と言語聴覚士と保育士が児童館に訪問する事業を行っていて、年間6か所ですが、次年度から11か所に拡大する計画を立て、実際、発達センターが出向いているのは2館のことだが、東部児童館と佐須児童館に年間1回ずつか。</p> <p>〈委員〉 今年から実施したので、1館に対し、それぞれ作業療法士が2回、言語聴覚士が2回。来年度は、回数の調整をこれからするところだ。</p> <p>〈委員〉 特に講座のような形態ではなく、フリーの相談という感じ。</p> <p>〈委員〉 そうだ。</p> <p>〈委員〉 お母さんたちが遊んでいるところにすっと入っていて、近所のおばちゃんのような感じで、お子さんとかかわるイメージである。</p> <p>〈委員〉 会長の発言のように、相談をうけますよという感じだと、なかなかお母さんたちも気軽に、聞きたいことがあるとは言えないので、子どもを遊ばせる中で、相談できるような自然な雰囲気。</p> <p>〈会長〉 公民館でこの間ちょっと講演し、それは乳幼児向けなのだが、相談できる雰囲気ではなくなってしまう。児童館の子育てひろばみたいなところが、家の近くに機関の枠を超えてぽつぽつあるといいと思う。願わくば、そこに配置できる人がたくさんいれば、本当にいい形になると思う。</p> <p>〈委員〉 今年、ペアレントメンターを活用した会を2回以上している。私自身もペアレントメンターをやっているので、今、言ったように集まりましょうという形でやると、なかなかそこに申込みをして来られない人もいる。そういうときに、もっと身近なふだんの療育の中で、例えば療育を全6回やったら、その6回のうち5回目のところにメンターが入って「今日メンターさんがいるので、お話を一緒に聞きますよ」という形でやる。それで、例えば年度末に体験談を語ってもらうような大きなイベントやるとなおよ。そのメンターというのがどういうものかって、思っただけではなかなか分かりにくいため、もっと気軽に使っていただけたらと思う。</p> <p>他の自治体でこの前ちょっと聞いてきたが、それは健康推進課がやる、発達にちょっと心配のある方たちの3～4回の療育みたいな、遊びの広場の中で、その一回にメンターを2人呼んで、保護者の方5人ぐらいとお話しする会があったのだが、確実に来ること。お子さんを連れていいく。そうすると、その方は、メンターとはこういう方で、こういうことを相談できるのだなというのが分かるので、いいと思った。そん</p>
--	--

な仰々しくなくてもメンターは使えるので、そういう活用方法ももし必要であれば、紹介されるとありがたいと思っている。

〈会長〉 何かありますか、事務局のほうで。いい提案だなと思って聞いた。

〈事務局〉 そのように考えたことはなかった。確かに確実に保護者が集まる機会に入るというのは、いいアイデアだと思う。検討していきたい。

〈会長〉 保育園が子育て支援の場として機能しやすいというのは、先生方は大変だけれど、親たちが確実に来る。だから、嫌でも顔を突き合わせるから、強制ではなくて、普通にそこに足が向いて、そこで顔を突き合わせられて、その中に何か仕掛けがあって、さっきの情報の話ではないがうまく紛れ込んでいて、今のメンターの話もそうだしそういう構造になっていくとより発展していくのかなと思った。

〈委員〉 メンターの話で個人的な感想ですが、ふだん生活しているとメンターという響き自体がとても珍しい。海外のドラマを見ると、メンターのようなカウンセリングもすごく発達している。既に経験された先輩の話を聞くという機会が、海外ではすごく多い印象を抱く。

障害児を育てていると、周りに意外にいなくて、センターに来ると「こんなに親御さんがいるのだ」と思う。でも、センターから出て外に行くと本当に薄まってしまう。近所に全然おらず、そういう相談ができなくなり孤立していくのが幼児期だと思う。本当に気持ちが打ちのめされるというのが、今ここに通っている利用者。児童館の子育てひろばに通われているとか、保育園に行かれているお母様たちが本当にちょっとささいな、「歩きがみんなより遅いな」とか、「階段を上るのが下手くそだな」、「はしを使えないな」という、そういう本当にちょっとしたことを相談できる場が身近にあまりない。なので、先ほどおっしゃっていたような専門職が何となく、その場にいるとか、あとは保育園の先生がちょっと声をかけてくれるとかというのがとても頼りになる。ただ、そういう方は、やはり保育士とか何とか士という専門職の方々なので、実際の保護者の立場としては、やはり気持ちが共有できないというところで、先ほど委員がおっしゃっていたペアレントメンターは、とてもいいと思う。

障害が違ったとしても、先輩ママたちがこのようにしてきたよという道筋が目の前にあると、光というか、希望を感じるというか支えになる。そうすると、子育てが明るくなれるというか、そんなに暗くならなくて大丈夫かもしれないと思えるのだと思う。それで、幸いにも今、私の子どもたちの上の世代も本当にいろいろ進化しているというか、自分の子どもをセンターに通わせる時って、高校に行けるのか大学に行けるのかってとても不安だった。実際、大学へ行ったとか、高校へ行ったというお話をメンターの方々から聞けるだけでも、大丈夫かもしれないと思

	<p>えたりするので、メンターという制度をもう少し広めていっていただけ ると、発達センターの先生方も保護者に対して接しやすくなったりする のではないかなと思うので、ぜひ進めていただければと思う。</p>
〈会長〉	<p>大事なお話。メンターという言葉はどこまで浸透しているか。今、企 業の初任者研修とかでは当たり前に行っている。でも、本当に近所のお ばちゃんなのですよ。イメージとしては。だけど、ちゃんとしたことを 知っている。ある種カモフラージュといえばカモフラージュなのだけれ ども、そのほうがずっと力を抜いていける。</p>
〈委員〉	<p>研修を受けている。近所のおばちゃんなのだけれど、お節介おばちゃん にならないように気を付けている。</p>
〈委員〉	<p>あそこはいいのよとか、あそこは駄目よというのは言わない。</p>
〈会長〉	<p>でも、いい御意見だと思うので、ぜひ取り上げてほしいと思う。</p>
〈委員〉	<p>調布市のペアレントメンターを本当はもっと増やしていただきたい が、現在、東京都が養成研修をやっていないので、そこが課題。</p>
〈会長〉	<p>子育て支援員研修というのをやっているが、あの中に障害を抱えた子 どもたちの支援をするというところが弱い。それこそ私は、子育て支援 員研修である科目を持っているが、そこでグループワークをやると、子 育て支援員で現場に行かれる方の中でも、障害のある子どもたちのケア というのは難しいとか分からぬといいうのがいっぱい出てくる。だから、 その辺りの研修みたいなものが、調布だけでもいいから、何かそういう のができるとよい。子育て支援員の障害者、障害を持った子どもたち との関わりはどうか。</p>
〈委員〉	<p>職員ですか。</p>
〈会長〉	<p>はい。あまり接点はない。</p>
〈委員〉	<p>いや、障害児枠で入園されるお子さんもいらっしゃる。</p>
〈会長〉	<p>いますよね。たまに子育て支援員の方は関わっていますか。</p>
〈委員〉	<p>子育て支援の方がというのは、直接はないのですが、公立園の場合 は言語聴覚士、スーパーバイザーの巡回があるので、そこで職員とは 研修を行っている。</p>
〈会長〉	<p>そうなってしまう。さっきの話で、子育て支援員は、すごくいい意味</p>

で中途半端なところにいるので、その方が障害児のケアのことをしっかりと分かっていると、さっきの役割を果たすということにつながっていくから、そのように持つていけるといいと思う。調布ができる範囲でいいと思うので、先行事例みたいな形で好事例をつくると広がっていくから、実施できるといい。

とにかく今日冒頭の話で、親の会の方々が要望したことが次々と実践されていくというすばらしい話を聞いたので、今日の話もすごくいい方向の話なので、実現をしてほしいと思う。

(3) その他

〈事務局〉 次年度予定説明

〈会長〉 本当に短い時間だったが活発な御意見が出て、しかも、意味のあるとても大事なことが共有されたと思う。次回まで間があるが、引き続きどうぞよろしくお願いたしたい。

——了——